

【雨漏】あまもり

かつて「侘び茶とは金持ちが貧乏のまねをすることだ」という珍説を耳にしたことがあります。到底受け入れ難い説ながらも、どこか「うまいこと言うなあ」と感心してしまうところのある言葉です。

茶道具の展示会であばら屋住まいを想わせる銘「雨漏」という粉引茶碗に趣を感じながらも、あまりの高額に仰天してしまうとき、貧乏のまね説は正しいのではと錯覚をおこしてしまいます。

この説が正論でないことはどなたも直感的におわかりでしょう。しかし、これに反論するとなると以外に厄介なことのようです。徒然なるままに試みてみましょう。

茶人が茶道具に田舎の風景を想わせる銘を付け、質素、不完全な美を賞賛するのは風情を好むからです。こうした傾向を侘びといいます。

茶人が田舎の風情を好む訳は隠遁思想にその源があると私は思います。欲望の渦巻く市中から距離をおき、山里の草庵に遁世して、読書・歌作に更け、時折訪れる友と清談を交わす。こうした文人的隠棲へのあこがれを源とするのです。

中国より日本へ伝わった隠遁思想は現世を否定的に捉える浄土思想、さらに無常観へと展開していきました。

絢爛豪華、豪放闊達な文化の桃山時代に大成しながら、侘び茶は極めて質素な美意識であり、世俗に対する否定的精神に根ざしています。茶道具のかもしだす風情にこの世の無常を重ね、その哀れな姿に美を見出そうとするのです。

茶人の心は市中を離れ風情を求め山里にあこがれるものです。しかし、現実の世では隠棲を望んでもできない立場の人がほとんどです。このような人がせめてひと時でも隠遁的空間に身を置きたいと思うとき、市中に居ながらにして山里の風情を想わせる茶室や茶道具を求め侘び茶に傾くのです。

田舎の風情は貧しさと本質的に異なるものですが表面的には似ているかもしれません。脱俗の精神や風情に欠ければ侘び茶は「貧乏のまね」と誤解、あるいは揶揄されてしまうのです。

「貧乏のまね」説が妙に説得力を持つのは、侘び茶人がなおも世俗に執着したまま茶筌を振っているからではないでしょうか。

ところで、「侘び茶は金持ちが貧乏のまねをすることだ」説にはもうひとつ重要な問いかけが含まれているように思われます。

今、「貧乏のまね」は誤解として削除してみましょう。「侘び茶は金持ちがすることだ」となります。

あまりのショックに茶筌を振る手が止まってしまうのは私だけでしょうか。私のように庶民茶しか出来ない者は侘び茶を求める資格がないのでしょうか。

主たる矛盾の原因は茶道具にあると思われます。「侘び」「心」といいながらも茶には道具が必要で、優れた茶道具は高価なものです。

言うまでもなく名品をずらりと並べただけの茶会は道具の鑑賞会にすぎません。

古市播磨法師宛珠光一紙、通称「心の文」には「一向かなハぬ人体ハ、道具にハからかふへからす候也」、利休も「道具はあり合わせにせよ」と庶民を慰めてくれますが、「道具は何でもいい」では茶会は点前の発表会に過ぎなくなってしまいます。主客の会話さえ弾めばよいと言うのであれば喫茶店で事足りるはずです。

茶道具は如何にあるべきかという問いは、茶の湯の意義そのものへの問いかけでもあります。この命題を解決するための一歩として、私は道具組の方法を理論化していきたいと思っています。道具組の方法から道具のあり方を明らかにできればと思うのです。庶民茶のあるべき姿が見えてくるとよいのですが。

いつの日かまとまりましたら『茶の湯銘事典』同様みな様にお届けしますので、その折にはご批判をお寄せください。

遅れ馳せながら、銘「雨漏」の解説をまとめましょう。

粉引・熊川・堅手などの高麗茶碗に染みのような景色が生じた茶碗があります。これら雨漏手と称する茶碗の多くに「雨漏」の銘が付いています。もちろん、雨漏りした壁の景色に似ているからです。長年使い続けた末、釉薬のかからない箇所から染みが広がったものです。畠山記念館や福岡市美術館の物が世に知られています。当然、梅雨の季節に適う銘ですね。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~